

創価教育研究センター主催講演会(1) 2000.11.18
シリーズ「草創の大学を語る」①

創立者と学生—全員が創立者の精神で—

篠原 誠

嵐の大学紛争

この秋は、あまりいい天気がありませんでした。しかし、今日は、珍しく恵まれた好天の中で、牧口常三郎先生の『創価教育学体系』発刊70周年の記念行事が持てますことを、共々に喜び合いたいと思います。

今日、11月18日を記念して、第三文明社から『牧口常三郎 獄中の戦い』（第三文明社編。宮田幸一監修）が出版されました。『牧口常三郎全集』の第十巻には、軍部政府の弾圧で逮捕された際の、先生の訊問調書であるとか、獄中からの手紙が収録されていますけれど、それをさらに詳細に解説したものであります。非常に貴重なものですから、ぜひお読みになっていただきたいと思っております。

私は、牧口先生、戸田先生の「創価教育」の伝統を受け継いで、発展させた創立者、池田先生によります、我が創価大学の草創期建設の一端について、少々お話をさせていただきます。

私は、昭和46年の開学から16年間、初代の学生部長として創大建設に努力いたしました。大学がスタートする直前の時代は、いわゆる「大学紛争」の時期に当たっていました。

日本だけではなく、全世界的にゲバルト（暴力）思想が風靡して、私の記憶でも、紛争のない大学は珍しかったのではないかと。至る所で大学構内を壊したり、学長や学生部長をつるし上げるという事件が頻発していました。

東大の教養学部には、女性革命家ローザ・ルクセンブルクに因んで、ゲバルト・ローザなどという女性が登場し、男子学生を率いて当局追求の先頭に立ったのも、この時代のことです。そして、ついには、東大の安田講堂で有名な立てこもり事件があり、機動隊と学生たちとの間で、激しい攻防戦があったことを記憶されている方もいらっしゃると思います。

その間、東大は自分の母校でもありますので心配で、何回も足を運んで様子を見に行っ

ておりました。現場では、手拭いで顔を覆い、ヘルメットを被って、竹竿とか棍棒を持って、色々な派閥のメンバーが対峙していました。その集団が、次々にアジ演説をしているわけですけど、よく聞いていても何を言わんとしているのか、なかなか分らない。

実は、私だけが分らなかつただけでなく、社会全体でもこの紛争が一体何だったのか、誰も分らなかつたんですね。まるで熱病の如く、ヨーロッパから始まって、アメリカに渡り、日本にまで飛び火してきた。アメリカではベトナム戦争に直面していた時代ですから、学生たちにとっては切実な課題があったわけですが、日本の平和な時代に、何故、学生たちが暴れ回っているのだろうか、と誰もが戸惑ったわけです。

そんな混沌とした時に、池田先生がその本質を鋭く喝破されたんです。それは「本来、大学というのは学生が主体なのではないか」という一点でした。長い歴史の中で、本来、主体であるべき学生が主体ではなくなって、教員であるとか、研究者であるとか、あるいは大学によっては理事者が中心になってしまい、肝心の主体者が片隅に追いやられてしまっている。

そういう現状を、見抜いていた学生たちが、大学というのは、自分たちが中心ではないのか、という不満を爆発させていたんですね。そういう風に見れば、紛争の本質が分るのだ、と池田先生は良く教えて下さいました。そのように見極めた上で、池田先生は「創価大学は学生中心でいこう」と大前提を決められたわけです。

大学運営に「学生参加」を貫く

そして、開学2年前の昭和44年5月3日には、池田先生は次のような講演をされました。「創価大学は学内の運営に関しても学生参加の原則を実現し、理想的な学園共同体にしていきたい」（第32回「創価学会本部総会」講演会から）

当時、当事者としては誰も言わなかつた「学生参加」ということを鮮明にされたのです。これは開学後になっての事ですけども、昭和48年7月15日の「第二回滝山祭」の折にも、この講演の精神をそのまま語られています。

「ともかくも創価大学は、人類の幸福と繁栄、世界の恒久平和をめざし、現代の世界に先駆を切って生まれた大学です。学生を根幹として教授、職員、理事が一体となって21世紀への船出をしている大学であります。昭和44年の大学設立の講演のなかで、私はあくまでも創価大学は学生の側にたつてつくる、学生を守り育てる、故に学生参加の原則を貫くと明確に宣言しておきました。この宣言だけは、創立者の精神として、また創価大学の理想を実現する不可欠の条件として決して忘れないで進んでいっていただきたい」（『創立者

の語らい』Vol.1 86ページ)

これが創価大学にとって、非常に重要な柱となっているんですね。創価学園の場合も当然、同じだと思いますけれども、特に、大学生は大人であるという前提があるわけですから、大学の研究はもちろん、大学運営に関しても学生参加でいくということで、創価大学は始まったわけです。

ところが、むしろ理事者や教員の側が、そのことを理解せず、いかにも古めかしいことをやっていたという点がありました。ことに開学1年後、昭和47年のことになりますが、「学費問題」を契機に学生諸君から厳しい突き上げを食い、「全学協議会」というのが出来ました。これは、教員、職員、学生、理事会、この四者が集まりまして、非常に重要な問題について対等な立場で話し合うという機関です。こうした例は、当時としては、日本では例がなかったようです。

この「学費問題」というのは、理事会が学費を改定しようと考えたわけです。色々な案を作って、かなり煮詰めた段階で学生自治会に計ったわけです。やはり創立者から「学生参加」と言われているから、計らなくてはいけないだろう、ということで計ったわけです。

ところが、自治会から猛反対されました。「ここまで案件を煮詰めてしまって、明日にも発表出来るような形にしてから、相談したいと言っても、相談にならないではないか」とか「我々が議論する、参加するよちがないではないか」と1期生、2期生の学生から強く抗議されました。

それで理事会も深く反省しました。「学生参加」という意識が、学生諸君にここまで深く浸透していることを再認識し、我々としても、もう一回最初から検討し直そうと「学費改定案」を白紙撤回した経緯があります。結局、学費の値上げは、3期生の代になってからになりました

そういうことを契機として、世界中であまり例のないと言われる「全学協議会」が発足いたしました。これが本学の重要な機関になっております。このことが、今日の話として一番大事なことなんです。

全員が創立者の精神で

それと関連があることですが、創立者池田先生の話の中に、「創立者の精神で」という有名なスピーチがあります。池田先生が大学でスピーチされたり、学生と懇談された内容を収めた『21世紀の潮流』とか『創立者の語らい』という本に収録されています。

確かに、草創期当時には、多くの課題がたくさんありました。そう簡単に解決も出来ない。軌道に乗れば何とかなるにしても、何事も最初が難しいわけです。当初は、創価大学

が開学する頃は、夢の学園が出来るみたいに思われていた点もありました。しかし、厳しい現実の中で、理想がそう簡単に実現出来るはずありません。我々も、色々な課題が出てくるだろうと予測はしていましたが、果たせるかな、次々と問題が出てまいりました。大学側が良いことだと考えていても、学生の側からは反対が出たりして、教員、職員、学生、理事会も何となくギクシャクして、なかなか理想の学園の姿になりませんでした。

そんな時に、創立者池田先生が昭和47年秋の「第2回創大祭記念フェスティバル」の席で、学生に向かって「全員が創立者の精神でやってもらいたい」という有名なスピーチをされたのです。

「創価大学は、学園紛争の火がもえあがっているさなかに、新しい、真の学園・教育の場を現出すべき必然性の意味を含んで建設された大学です。当初は、昭和48年に発足する予定だった。しかし、余りにも学園紛争が激しく、色々な意味を考えて、昭和46年に開校した。それ故に、1期生、2期生の諸君は本来であるならば創価大学がないのに入ってきたことになる。ここに意味がある。1期生、2期生の諸君は、どうか自分たちがこの大学の創立者であると自覚をし、本気になってもらいたい。(略) 私が諸君に期待する真心を汲みとって、創立者の学生になってもらいたい。私は諸君を心から尊敬し、また信頼もしております」

学生だけでなく、本学の全員に向かって言われたと思います。自分たちが創立者であると自覚して大学建学をしてもらいたい、というスゴイ内容だったのです。物事の流れを見極めて、それをどう表現するかということが非常に重要な事だな、と私はその時、感じたものです。

このスピーチを聞いて、全学の雰囲気がガラリと変わったことを、私は今でも鮮明に覚えております。それまでは、何だかんだと、色々な部門を代表して争っていたのが、さっと治まった。「そうだ。創価大学は発足したばかりなんだ。今、創り始めたばかりなんだ」と自覚を新たにしたのです。

創立して50年、100年も経った大学と比較して、あれも無いとか、これも無いとか、これもまだ出来てないと言っているのではなく、自分たちが今、大学を創る主体者としての創立者として、無から有を生ずるように創造していけばよいのだと、皆心から納得したのです。これ以後、本当に全学の流れがスムーズに行くようになったのです。

以上、「学生が主体である」、「学生参加の原則を貫く」ということ、それから「全員が創立者」であり、全員でこの新しい大学を創っていくのだ、という画期的なスピーチによって、創価大学は軌道に乗り、以後、約30年後の今日まで、着々と発展してきたことを申し上げたいのであります。

一対一の触れ合いで人材輩出

これで終わると、固い話だけで終わってしまうので、創立者と学生諸君にまつわるエピソードを紹介しましょう。

草創期における2大イベントというのは、ご存じのように「滝山祭」と「創大祭」です。今、「滝山祭」は少し、お休み状態になっていますけれども、「第1回滝山祭」は雨に崇られました。大体、名前が「滝山」というものですから、水に縁があるらしくて、よく降られました。時期的に7月の半ばぐらいの開催で、ちょうど梅雨の終わり時ですから、降るのが当たり前なのかも知れません。

その歴史に残る第1回の時、創立者は奥入瀬川の溪流の話をされながら、詩を発表されました。

滝のように 激しく
滝のように 弛まず
滝のように 恐れず
滝のように 朗らかに
滝のように 堂々と
男は 王者の風格を持て

「滝山祭」に因んで、「滝」をたたえた詩だったのです。参加した学生たちにとっては、人生の大切な指標を与えられ、忘れ得ぬ思い出となっております。

昭和48年7月の「第二回滝山祭」は、2日間とも珍しく晴天でした。初日の14日には、煌煌と月がキャンパスを照らし、創立者は「満月も 滝山祭に 笑顔かな」との句を詠んでいます。ところが、翌日には、「名月に 師弟はきびし 滝山祭」という句が残されています。何が「きびし」なのか、分らないと思いますが、私は今でも思い出すことがあるんです。

その夜遅くなって、残っているメンバーでお月見をしよう、ということになりました。季節的には秋ではなかったわけですが、屋上で先生を中心に名月鑑賞をやったんです。そこで日本伝統文化研究会などが集まって、出席者たちにお茶を差し上げたりしたんです。

その時に、創立者にお茶を勧めた男子学生がいました。彼は着物姿で、静々と進み出しました。ところが、先生は彼の顔をご覧になって、ユーモアたっぷりに「あっ、君は、さっき体育館で居眠りしていたね」と言われたんです。あの中央体育館の大勢の中で、よく先生は目に止められたな、と思うんですけど、本人は居眠りしてたらしいんです。恐らく、

色々な準備が何かでくたびれて、肝心な時に寝てしまったのではないのでしょうか。先生は、そのことをちゃんと覚えておられたんですね。

本人も頭を搔いたので、皆、大笑いになりました。そこで先生は、即席で「名月に 師弟はきびし 滝山祭」という句を作って、彼に下さったのです。まさに、草創期から美しい一対一の触れ合いであり、激励だったのです。

また、先生は授業参観をされたこともあります。突然の参観でした。いつも遅れてくる学生が、その日も授業に遅刻して行ったら、見なれない人が後の席に座っていた。よくよく見たら、池田先生だった、というエピソードが残っています。

また、眠っている自分の肩を叩く人がいる。うるさいと思って振り返ったら、それは創立者だった、という話も残っています。

また、池田先生は、寮生を大事に、と言われ全寮を訪問されています。寮生と会食をされたことも幾度もあります。

また、創立者は、クラブ活動が大事だといわれ、力をいれていただきました。授業というのは、単位を取るために、やむを得ず出ている場合もありますよね。しかし、クラブの方は自分が望んで入ってやっているのだから、活動しながら大いに成長するということで、一つひとつのクラブを大事にされました。

今でも精神的にも、経済的にも応援されていますけれども、クラブの名称なども「先生！名前を付けて下さい」という要望がよく出ました。

そういう場合に、先生は自主性を尊重され、「自分たちで付けなさい」という場合と、「案を出しなさい。いくつかの案の中から決めてあげたい」とか、色々なケースがありました。要望が出され、その場でパッと付けられた場合もあるんです。私が、一番覚えているのは、あの「銀嶺合唱団」という名称が決まった時のことです。

合唱団が常時使用している音楽室は、教室から離れたところにありますね。そこで、毎回、毎回、行事がある度に、合唱団が「先生、音楽室で合唱をやりますから、ぜひ、いらして下さい」とご招待していたんですが、なかなかそこまで行かれるゆとりはなかったんです。

そこで私も考えて、「音楽室でないと効果が上がらないかも知れないけれども、先生のいらっしゃる所へ、こちらから行って歌ってはどうか」と提案したことがあります。そうだ、そうだ、ということになり、3階の「天空広場」で色々な行事があった折に、合唱団が押しかけて、歌う機会を作ってもらいました。

その時に「合唱団の名前を」とのお願いが出ました。すると、先生は西方にそびえる白雪の富士を遠望されて、「じゃあ、銀嶺合唱団にしようか」と、スパッと言われたのです。

「銀嶺」という言葉がすぐ出てくるのが、如何にも先生らしいところですね。詩人ですね。

こういう温かな触れ合いの中で、人材が着々と育っていったんです。この対一の触れ合いこそが、牧口先生、戸田先生以来の「創価教育」の伝統ではないか、と私は思っております。

世界に「創価教育」の潮流

今や、「創価教育」は世界的な展開になってきています。

ことに今年の8月には、インドに「創価池田女子大学」というのが出来ましたね。クマナンさんという教育者が「創価教育」に感激して女子大学を創られた。また、いよいよ来年5月には、アメリカ創価大学が出来る。この11月3日には、アメリカの有名な女子大学である、ウェルズリー大学の代表が来学され、創立者が「教育変革貢献賞」第一号を受賞しましたね。内容を聞いてみますと、全米で300以上の大学が教育変革プロジェクトを推進しているようですが、それに貢献するアメリカ創価大学に期待を寄せての顕彰だったのです。開学する前から、アメリカ創価大学の理念に感動されているわけですね。

来年、創価大学の姉妹校であるアメリカ創価大学が開学すると、世界的な「創価教育」の流れが確実に出来てくると思います。私たちも、その一翼を担って前進して参りたいと思っている次第でございます。

最後に、今朝発表された先生の長編詩「創価の旭日 永遠なる師弟の栄光」の創価大学に関係あるところを読ませて頂きます。

時は巡り／昭和25年（1950年）の／11月16日／秋晴れの日であった。

学会創立20周年／牧口先生の7回忌を前に／戸田先生の事業は／最悪の苦境にあった／先生と私は／日本大学の食堂へ行き／学生の賑わう中で／昼食を取りながら／語り合った。

「大作／創価大学をつくろうな。／これが／牧口先生の悲願だった。

私の健在のうちには／駄目かもしれない。／大作、頼むよ。／世界第一の大学に／しようではないか」

以来 満50年／師匠との約束は／すべて果たした。

明2001年5月3日には／オレンジ郡に／アメリカ創価大学が開学。／栄光の／「創価教育の世紀」が／燦然と開幕する。

篠原 誠

以上で私の拙いスピーチを終わりといたします。